

# 大学における参加型シティズンシップ教育の可能性 ～災害ボランティア研修の実践を通しての考察<sup>†</sup>

長谷川万由美\*  
宇都宮大学教育学部\*

災害ボランティアへの積極的な参加が大学生に期待されている。そのために必要な「学習の機会の提供」と「参加する場所の確保」を視野に入れた、参加型シティズンシップ教育の機会として学生を対象として平成27年関東・東北豪雨災害の被災地である鹿沼市をフィールドとして、コミュニティ支援力養成研修in鹿沼を開催した。参加した学生からは被災地に触れたことでボランティアへの視野が広がり、今後の活動につながる様子が見られた。また、実施を通して大学と社会福祉協議会と市民との協働が深まり、研修実施のノウハウの蓄積ができた。

キーワード：災害ボランティア、シティズンシップ教育、豪雨災害、HUG、クロスロード

## 1. 災害ボランティアとシティズンシップ教育

災害ボランティアとは災害復旧、災害救援に関わる直後の活動だけでなく、その後の復興支援や平常時の防災・減災に関わる活動も含む幅広い活動を行うボランティアとかがえられる（菅磨、2008）。災害後、時間的経過に伴って生ずる様々な課題に対応しながら、コミュニティの復興と再生を図る過程にボランティアとして関わるのが災害ボランティアであり、コミュニティを支える力が求められる。このような社会の課題を自分の問題として捉え、解決に向け行動できることは社会の一員として必要な素質（シティズンシップ）として重要であると考えられる。

2011年の東日本大震災をきっかけとして、災害ボランティアへの大学生の積極的な参加がますます期待されるようになっており、関東・東北豪雨災害や熊本地震など、その後の大規模災害でも、学生ボランティアの存在は大きかった。

しかし、社会が期待しているほどに、実際に行動に移せる大学生は多くないのではないだろうか。そ

の原因としては大学教育の中で、災害ボランティアに求められるコミュニティを支える力、すなわちシティズンシップをどのように身につけるかがきちんと位置づけられていないことがあげられる。

筆者は拙稿（2015）の中で、シティズンシップ教育がどのように進められるべきか高等教育機関ではまだ十分検討されておらず、経済産業省の2008年の報告書で述べられていたような「学習機会の提供」と「参画の場の確保」の両輪を意識して進めていくことが重要であることを指摘した。学生が地域との関わりを持つ機会が大学の学習だけではあまり持てず、結果としてコミュニティ支援に参画する場がないのでは、災害が起こったときにボランティア活動に結びつかないのは不思議ではない。そこで参加型シティズンシップ教育として「学習機会の提供」と「参画の場の確保」を意識した研修を行うことで、災害ボランティア活動につながる市民性を学生の中に醸成することを目的として、コミュニティ支援力養成研修を行うこととした。

また、平成27年9月の関東・東北豪雨災害で災害ボランティアとして活動した学生が少なからずいたが、学生は卒業してしまい、中々その経験を次の代に継承していくことは難しい。そこで、関東・東北豪雨災害の被災地にある大学の責務として、被災の状況や当時の学生の活動の様子を学生に継承していくことを目的として、このような事業の必要性を感

<sup>†</sup> Mayumi HASEGAWA\*: Citizenship Education for Volunteering for Disaster Area: Seminar on Community Building in Kanuma

Keywords: Volunteering, Citizenship Education, HUG, Crossroad

\* School of Education, Utsunomiya University  
(連絡先: mayumit@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

じた。そのため豪雨災害時に本学から学生ボランティアが多く参加した鹿沼市社会福祉協議会(以下、鹿社協とする)と協働での実施を企画した。

## 2. コミュニティ支援力養成研修実施の経緯

### (1) 第六回コミュニティ支援力養成研修

学生が災害復興に向けた行動力や参画力を身につけることを目的としたコミュニティ支援力養成研修は、岩手県立大学が平成23年に文部科学省の「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」の補助を得て行っていた研修の一環として始まった。その第六回を平成26年にNPO法人いわてGINGA-NETおよび神戸市のNPO法人さくらネットとの協働のもと本学と岩手県立大学と共催で本学を会場として一泊二日の日程で行った。



図1 学生のワークショップ

第六回のテーマは「隣接地の拠点形成とボランティアコーディネート～首都直下地震、その時、何をすべきか!～」とし、首都直下地震が来たときに東北などからのボランティアの受け入れ窓口になるのではないかという想定のもと、大学生として何ができるかを考える内容であった。北は岩手県立大学、西は日本福祉大学まで全国から約50人の学生の参加があり、東日本大震災で実際に活動したNPOや社会福祉協議会の職員からボランティアセンターの発足、活動の組み立て方、災害時の隣接支援や遠距離支援の進め方などについて学んだ後、グループに分かれて今後自分たちが何ができるのかを討議して発表したり、福島第一原子力発電所の事故により避難してきた福島県の人々を一時避難として受け入れていた芳賀青年の家に宿泊し、職員の方

から当時の様子や被災者との関わりを伺い、栃木県での実際の対応を学んだりした。

一日目の夜から大型の台風19号が接近し、遠方からの参加者は二日目の昼までで予定を切り上げて帰ることになり、図らずも自然災害への対応を実地に学ぶこととなった。この二日間の研修を通して災害時支援について参加学生の理解は大きく深まった。

### (2) コミュニティ支援力養成研修in鹿沼の企画

第六回コミュニティ支援力養成研修で本学とつながりができた岩手県立大学や第七回コミュニティ支援力養成研修を開催した広島市の広島大学から、平成27年9月の関東・東北豪雨災害の時に、鹿沼市に学生がボランティアで入ってくれた。そこで、東日本大震災の被災地である岩手県の岩手県立大学が中心となって、学生の「学習機会の提供」と「参画の場の確保」を行ってきたように、関東・東北豪雨災害の被災地である栃木県ならではの「学習機会の提供」と「参画の場の確保」を視野に入れたコミュニティ支援力養成研修ができないかと考え、豪雨災害時に学生とともにボランティア活動を行った鹿沼市をフィールドとしたコミュニティ支援力養成研修を行うことを企画するに至った(注1)。

## 3. コミュニティ支援力養成研修in鹿沼の準備

### (1) 鹿沼での実施に向けた準備

平成28年度に入り鹿社協が実施する災害ボランティアセンター運営マニュアル改定に向けた検証会にオブザーバーとして参加しながら、鹿社協と相談の上、研修のアウトラインを決定した。10月に入り、鹿社協と実施に向けて具体的な検討を開始した。

この研修の目的として、「豪雨災害時の災害ボランティア活動への学生の参加に関する振り返りを行う」「被災者と交流することを通して、被災者の心のケアになる」「来るべき災害時に備え、学生の中でのコミュニティ支援力が高まる」などを設定し、内容の詳細を決定していった。具体的には、豪雨災害の被災状況の把握と被災場所の見学、実践形式での避難所運営のあり方などについて学生相互の学び合いを促すことを通じて、今後の取組につながるような流れを考えた。

## (2) 学生準備グループ（鹿沼班）による企画と準備

学生の企画運営の中心として学生7名（総合人間形成課程「プロジェクト研究Ⅰ、Ⅱ」及び「社会福祉援助技術演習」の受講生）からなる準備班（通称鹿沼班）を作り、企画のための現地調査や準備を担当した。

平成28年10月20日には、鹿社協職員の協力のもと、事前ワークショップを開催し、鹿沼班の学生が参加した。前半は社協職員から災害ボランティアセンターや災害ボランティアについての講話を聞き、後半は府所本町付近や西鹿沼町に出向き、災害の跡地を見たり、住民の方からお話を伺ったりした。今では氾濫したことが信じられないような穏やかな川を前にして、住民の方から「今でも雨が降り止まない夢を見る」「雨音を聞くとこわい」「もっと低くなっている裏手の家がなくなってしまった」など今でも豪雨災害のショックが癒えていないことや災害によって環境が変化してしまったことに慣れずにいる様子を直接伺う貴重な機会となった。また、鹿沼班の学生たちは、被災から1年たった平成28年9月9日に鹿社協で行われたキャンドルナイトとトークセッションに参加したり、11月に旧栗野地区で実施された木リンピックにボランティアとして参加したりして準備の過程で鹿沼市との関わりを深めていった。

## 3. コミュニティ支援力養成研修in鹿沼の実施

### (1) コミュニティ支援力養成研修in 鹿沼の概要

平成29年2月10日から11日にかけて、研修を行った。参加者は宇都宮大学学生19人の他、茨城大学の災害ボランティアサークルのメンバーの学生1人、ボランティア経験のある社会人1人の21人だった。支援者として鹿社協職員2人、豪雨災害時にボランティアの経験のある宇都宮大学卒業生2人と社会人1人と筆者の6人が参加した。日程は一泊二日で行い、鹿沼市自然体験交流センターに宿泊した（詳細は表1を参照）。

#### (1) 企画1「学生が見た鹿沼市の今」

1日目午後には二つの企画を行った。企画1では、事前調査の内容を被災者班、社協班、市役所班に分かれて報告した。また、被災者の方をお呼びし、当時の様子や心境についてお話していただいた。

表1 研修の内容

2月9日（金）

12：10	大学出発
12：50	鹿沼市社会福祉協議会到着
13：00	開会式
13：10	企画1 学生が見た鹿沼市の今（ヒヤリング内容等報告）「被災者班、社協班、市役所班の事前調査報告」「被災者のお話」
14：30	鹿社協によるまち歩きルート説明
14：40	企画2 被災地域のまち歩き
16：00	鹿社協に戻り振り返り
16：30	自然体験交流センターに向け出発
17：00	センターチェックイン
18：00	夕食
18：30	交流企画
20：30	交流企画終了

2月10日（金）

6：00	鹿沼班起床 調理準備
7：00	調理準備「Let's ポリ袋クッキング」
7：30	食事（持ち寄り缶詰をおかずにして）
8：30	センター出発
9：00	企画3 先輩学生、ボランティアさんに聞く卒業生 鈴木涼平さん、菅野浩史さん、藤田幸秀さん（各30分程度）
10：30	企画4 学生として何ができるか考えるためのグループワーク
12：00	グループごと発表
12：40	閉会式



図2 被災者のお話

## (2) 企画2「被災地域のまち歩き」

企画2では、実際に被災地を歩き、当時の様子と現在の状況について二グループに分かれ、それぞれ社協の職員の方に案内していただいた。第一班は改修が進む黒川の河川敷の見学や府所地区の被災箇所の様子を中心に見学した。



図3 鹿社協職員による被災地の案内

第二班は豪雨災害後改修工事が始まっている小藪川の様子や学生がボランティアでも伺ったことがある西鹿沼町を訪ねた。



図4 復旧途中の河川

現地で住民の方に、宇都宮大学の学生が勉強のため被災地を歩いているとお話すると、「水害のときに来てくれてたね」「宇大の人なんだね」と暖かく受け入れてくれたことが印象的であった。しかし、学生たちに当時のことを話しながら、「今でも思い出しますよ」と学生に被災した様子を切り出す場面もあり、水害による物的被害はほぼ修繕されたものの市民の方々の心の傷がまだ癒えていないことを伺い知ることもできた。

## 資料 作成したクロスロードカード

犬好きか猫好きか、どちらかと言えば大好きである。	恋ダンスとは何かを知っている？	自分の意見よりも他人の意見を尊重したい性質である	音楽は洋楽派それとも邦楽派	パクチーが好きである。
YES(犬派) OR NO(猫派)	YES(知ってる) OR NO(知らない)	YES(他人尊重) OR NO(自分)	YES(洋楽) OR NO(邦楽)	YES(好き) OR NO(嫌い)
あなたは 避難所担当職員	あなたは 被災者	あなたは 被災者	あなたは ボランティア	あなたは学生
災害当日、避難所には市民が殺到し、すでに想定している定員を超えている。あなたなら今後来る避難者を受け入れる？	あなたは犬を二匹飼っている。一番近い避難所はペットのための備蓄はほぼなく、世話をできそうな避難所は遠い。ペットのためにあなたは遠くの避難所に行く？	避難所で知らない家の子どもが騒いでいる。あなたは子どもたちに静かにするように声をかける？	片付けのボランティアに行った先でお礼にごちそうしたいと言われた。でもそこは一部損壊の家。ごちそうになる？	ファミレスで友達と食事中に大きな地震。建物が古く心配なので避難しようと友達に言っても大丈夫ととりあわない。一人でも外に出る？
YES(受け入れる) OR NO(受け入れない)	YES(遠く) OR NO(近く)	YES(かける) OR NO(かけない)	YES(なる) OR NO(断る)	YES(出る) OR NO(出ない)



### (3) 学生交流会「クロスロードとHUG」

宿泊場所である自然体験交流センターに移動してから、夜の企画として、学生交流企画を実施した。まず5～6人の班に分かれ、班ごとにクロスロードをベースとして学生が内容を考えたゲームをアイスブレイクも兼ねて行った(資料参照)(注2)。その後、同じメンバーで避難所HUGを実施した(注3)。HUGの読み手として鹿社協職員、社会人ボランティアが参加した。読み手はみな災害ボランティアの経験があり、被災時の様子を知っているだけに、学生にアドバイスも出しながら、次々に避難所に来る住民の様子が伝わるような臨場感を持ってHUGの進行を行った。



図5 HUGの実践

### (4) 朝食「サバイバルクッキング」

二日目の朝食は非常時体験としてポリ袋クッキングを行う予定だった。しかし、ポリ袋をバスの中に忘れるというアクシデントがあり、ごはんは普通に炊飯することになったが、持ち寄りの缶詰めをおかずの朝食で、非常時の食の一端を知ることができた。



図6 缶詰の持ち寄りでサバイバル朝食

### (5) 企画3「先輩学生、ボランティアに聞く」

朝食の後、鹿社協に戻り、企画3として「先輩学生、ボランティアに聞く」として豪雨災害のときに学生ボランティアとして参加した卒業生2人と社会人の災害ボランティア経験者より、当時の話やボランティアとしての心構えについてお話を伺った(それぞれのテーマについては表2参照)(図7)。参加した学生の中には、豪雨災害当時、大学から学生がボランティアとして鹿社協に行っていたことを知らない学生もいたが、次の学生として何ができるかを考える上で、同じ学生として災害当時に活動したことを直に聞いたことは大いに参考となった。

表2 先輩ボランティアのお話

講師氏名	主な内容
鈴木涼平 (卒業生)	豪雨災害からのボランティア活動、とくにお話聞き隊や鹿沼deサンタについて
菅野浩史 (卒業生)	豪雨災害からのボランティア活動、とくに泥出し活動、ボランティアとしての心構えについて
藤田幸秀 (社会人)	東日本大震災からの災害ボランティア活動を通しての経験から若い人に期待することについて



図7 先輩の座談会

### (6) 企画4「学生として何ができるか考えるWS」

最後に企画4として、学生を5班に分け、学生としてできることを話し合い、発表した。内容としてはボランティア活動に学生が参加しやすいような仕掛けとして授業などと呼びかけたり、SNSで情報を学生に拡散したりする計画、より復興に関心を持ってもらえるように鹿沼の被災地の当時と今の様子を発信する取り組み、地域住民と一緒に取り組む防災

マップ作りなどが提案された。また復興の様子を記事にまとめたうえで、時間がたつてしまい気になりながらも現地に行けない当時のボランティアに現状を知らせ、当時のボランティアの方と被災者の方をめぐり合わせる鹿沼ピフォアアフター計画なども提案された。



図 8 学生としてできることの発表

## 5. 研修に参加した学生の意識

次に、参加した学生の感想から、今回の研修により学生が得られたと思われる災害ボランティアとして活動する市民性につながる気づきに着目して、参加した学生の感想を整理して紹介したい。まず多かったのが現場を見ることの重要性である。

「実際に目で見て感じ取ることと写真や資料などを見て感じ取ることには、自身の心で感じ取り理解することと自身の頭の中で理解することでの大きな違いが生じ、実際に目で見ることの重要性を感じました。」

「全体を通して大きく感じたことは、「耳で聞くことと目で実際に見ることでは大きく異なる」ということである。」

隣接する市にある大学とはいえ、鹿沼市にはあまりなじみがない学生が多く、報道などで災害について知っていたが、実際に目にすることで、自分に身近な問題として認識することができたようである。

また、身近な問題として認識したことにより、あまりに多かったボランティアの認識が、より具体的なものとなり、今後の行動に結びつくような形となってきたことがわかる。

「私たちができることはなにか。直接ボランティアに行くことや、災害当時のことを外に向けて発信することなど、多くの選択肢はあるもののそれを実際にできる人は少ない。ならばもっと簡単なことからでもいいから始めてみよう。被災地を訪れる、被災地の人に話しかけてみる。こんなことでいいのかというようなことが、被災者の人々にとっては救いの一手になり得るのだと、私は今回の研修会で確信した。」

「ボランティアと聞くと実際に現場に入り作業をするというイメージが強いがボランティアとして必要とされていることはそういった作業だけでなく、被災者のメンタル面での支援や今回行った研修会などといった活動も様々な方がボランティアについて考えるきっかけとなることからボランティアの一つの形として重要であると感じた。」

「この研修会を経てボランティアにはたくさんの役割があると感じました。実際にお家などの泥だしや板をはがすなど体力的なものもあれば、ニーズを調査する係などがありました。ボランティアをするときは自分に合ったものに参加しようと思います。」

学生の中では、災害ボランティアというと泥出しやがれき撤去というような、体力も技術も必要な自分ではできない作業というイメージが強いようである。とくに企画4「学生にできることを考えるワークショップ」の内容が、ボランティア活動に行くというよりは、学生に被災地に関心を持ってもらう、ボランティアを考えてもらうという内容になったことにも現れている。学生の一人は学生と災害ボランティアの関係について感想の中で以下のように延べている。

「学生の強みを生かすこと、私たちにしかできないという意識を与えること。ボランティアに参加できない学生たちは、ボランティアのハードルを上げてしまっていたり、コミュニティに入ることを恐れてしまっていたりするケースがある。何が彼らの足を踏みとどまらせているのかを考えることで、それにあった対処法が見つかるはずだ。」

このような研修が学生が持っているボランティアに対する意識を見直し、参画できる活動として再認識される効果があることがわかる。総じて本研修が災害ボランティアとして活動する市民性につながる

体験となったと思われる。

## 6. 研修の成果と今後の展望

### (1) シティズンシップ教育の観点からみた成果

今回の研修の成果としては、災害時支援を視野に入れたコミュニティ支援力養成研修の実施を通して、大学と社協と市民との協働が深まったこと、学生を対象とした研修の内容とノウハウの蓄積ができたこと、ボランティアに参加した学生から参加したことがない学生への知識と記憶の継承ができたことなどが挙げられる。

また、冒頭で書いたように、今回は「学習機会の提供」と「参画の場の確保」を意識した研修を行うことで、災害ボランティア活動につながる市民性を学生の中に醸成することを目的とした研修の実施を目指した。学生の感想から、研修に参加し、災害ボランティアや被災地の現状について学んだこと、また今でもボランティアを必要としている現状を知ることから学生として今できることを考え、具体的な行動として意識することはできた。しかし、社協との連携事業であるということを考えれば、アイデアをすぐに実行に移すことも可能であったが、実際には中々そうは動かなかった。災害ボランティア活動につながる市民性の醸成という目的は果たされたものの、行動に移すところに繋がるのは容易ではないことも痛感した。

### (2) 今後の課題

豪雨災害でのボランティア活動をきっかけとして鹿沼市社会福祉協議会と本学との間で災害時のボランティア活動に関する協力も含めた協定を平成28年11月1日に締結した。災害時の協力関係を確実なものとするためには、平常時からの取り組みが不可欠である。今回のような社協と本学との協働による研修の実施はそのような平常時からの取り組みとして有効であり、今後も実施を積み重ねることが必要である。但し、被災箇所の見学などは復興に伴い難しくなっていくことから内容については状況に合わせて検討していく必要があると思われる。また学生の活動したいという気持ちを実際の行動につなげていくところまでは今回の研修では十分ではなかった。一泊二日という短期間では学生が行動に移すところまでは十分な関わりができなかったことも考えられるが、学習を通して気づいたことを行動につな

げるのは、「参画の場を確保」するだけでなく、その場に参画する体験の共有が必要ではないか。ワークショップで出たアイデアをその場で共有し、時間をおかずになんらかの行動につなげる仕組みを今後検討しながら、地域との平常時の協働実践として、このような研修を継続し、その効果を検証していきたい。

付記 本研修は平成29年度宇都宮大学「地域連携・貢献活動支援事業」として鹿沼市社会福祉協議会の協力を全面的に受けて実施した。鹿沼市社会福祉協議会のみなさん、学生の取材に応じてくれた鹿沼市役所、被災者の方々に感謝したい。

注1 台風18号およびその後の低気圧により平成27年9月10日から11日にかけて関東地方や東北地方の16観測地点で最大24時間降水量が観測史上1位となる豪雨となった。（「平成27年9月関東・東北豪雨に係る被害及び復旧状況等について」平成27年9月、国土交通省水管理・国土保全局資料より）。鹿沼市でも観測史上1位の降水量を記録し、死者1名、重傷者1名、家屋の全壊18棟、床上浸水361棟、床下浸水872棟、作物被害五億超の大きな被害があった（「関東・東北豪雨（平成27年9月9日、10日）における被害等状況について（平成28年9月27日現在）」、鹿沼市役所資料より）。

注2 クロスロードとは災害対応をカードゲームの形式で学ぶ教材である。大地震の被害軽減を目的に文部科学省が進める「大都市大震災軽減化特別プロジェクト」の一環として開発されたもので、カードの設問に対し、各自がYESかNOかで自分の意見を示す（または、多数派を予測する）、多数決により勝者を決定する。また、設問に対する正解は示されておらず、なぜそのように考えたのかについて、参加者同士で意見交換することが重要なポイントとなる。内閣府防災情報サイトより。

<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/>

[Keigen/torikumi/kthl9005.html](http://www.bousai.go.jp/kyoiku/Keigen/torikumi/kthl9005.html)

注3 避難所HUGは、避難所運営を皆で考えるためのひとつのアプローチとして静岡県が開発したゲームで、避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験

するもの。HUGは、H（hinanzyo 避難所）、U（unei 運営）、G（game ゲーム）からきている。静岡県危機管理部サイトより。

<https://www.pref.shizuoka.jp/bousai/seibu/hug/01hug-nani/01hug-nani.html>

#### 参考文献

シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会（2008）『シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会』報告書、経済産業省

清水幹夫（2014）「フィールドワーク実践報告：東日本大震災で被災した陸前高田市並びに広田地区のスタディツアーの試みと震災地スタディツアーの効果を高めるための構成因」現代福祉研究第14巻、95-125

菅磨志保（2008）「『災害ボランティアとは』」菅磨他『災害ボランティア論入門』弘文堂、60-67

菅磨志保・山下祐介・渥美公秀（2008）『災害ボランティア論入門』弘文堂

東北大学江東教育開発推進センター編（2012）『東日本大震災と大学教育の使命』東北大学出版会

長谷川万由美（2015）「被災地スタディツアーを通じたシティズンシップ教育の展開」宇都宮大学教育学部紀要第65巻 第1部、17-30

平成29年3月31日 受理